

## はじめに

東国古代遺跡研究会の活動も、二〇二〇年で一〇年目を迎えた。これまでに一〇回の研究会を開催し、会の拠点である国士舘大学のほか、長野県・茨城県・埼玉県を会場として、研究者や学生ばかりでなく多くの地域住民の参加もあった。一〇回目の研究会も、二〇二〇年二月に盛況のうちに終了した。

第九回東国古代遺跡研究会のテーマは「飛鳥時代の役所と地域社会」であり、幡羅官衙遺跡群の国史跡への指定を受けての記念シンポジウムとして、二〇一八年一月に埼玉県深谷市で開催された。主催は深谷市教育委員会で、研究会は熊谷市教育委員会・埼玉考古学会とともに共催として名を連ねた。当日は四八〇人の参加があり、特に学生や地域住民の参加が目立つ会場であった。本書は、このシンポジウムでの発表や討論などを基調として、さらに評制下の武蔵国を中心とした東国社会の様相を、関連する遺跡や手工業の視角から補完し『飛鳥時代の東国』としてまとめたものである。

本書の刊行にあたり、これまでの経緯について簡単にふれておきたい。幡羅遺跡については、二〇一一年一月に「郡家の成立と機能―幡羅遺跡をめぐる諸問題―」としてシンポジウムが開催されており、国指定に向けて第一歩を踏み出した活動として位置付けることができる。佐藤信(東京大学大学院教授)、山中敏史(奈良文化財研究所名誉研究員)、須田勉(国士舘大学教授、発表順。所属は当時)の講演と、幡羅遺跡・中宿遺跡・西別府廃寺の調査成果の発表のあと、会場からの質疑を交えた討論が行われた。調査報告をした遺跡のとおり、この時には幡羅遺跡と隣郡を対象とし

た内容に集中し、幡羅・中宿両遺跡の変遷や機能をめぐって発表・討論された。

最初のシンポジウムから約八年経過した今回は、これまでの調査成果を精査・検討し、飛鳥時代という地方行政組織の整備期に焦点を当て、地域社会と評・評家(評衙)のかかわりをテーマに設定した。指定後の保存・活用も念頭に研究者以外の参加も考えて、当日配布の資料集については、一般の参加者にも分かりやすい内容とするため、「です・ます調」を基本とすることなども打ち合わせた。発表の内容も、前回シンポジウムから範囲を広げ、宮瀧交二(大東文化大学教授)の講演を嚆矢として、幡羅遺跡・西別府祭祀遺跡の七世紀代の調査成果と、橘樹官衙遺跡群・西下谷田遺跡・御殿前遺跡の各評家遺跡の最新調査成果の報告や課題整理などが行われた。討論でも東国における評の成立や評家の整備を主要な議題として、会場からの発言も交えて進められた。本書はこの成果を基本に、四部構成として編集したものである。

さて、東国における飛鳥時代の考古学的研究は、古墳時代と古代のはざまにあって、終末期古墳の時代として、あるいはミヤケから国府・郡家へと移りかわる、古代社会への過渡期に相当する時代としてアプローチされている。七世紀は律令国家形成期といえる時代でありながら、多くの古墳が築造される世紀であり、飛鳥で豊浦宮・小墾田宮の造営や飛鳥寺が建立されるのとほぼ同時期、東国では常陸の虎塚古墳、下野の山王塚古墳、上野の八幡観音塚古墳、埼玉古墳群の中の山古墳、龍角寺古墳群の浅間山古墳など、主要な地域における最後の前方後円墳が築造されている。前方後円墳が終焉をむかえると、円墳や方墳のほかに上円下方墳・八角形墳などが造られ、これらの古墳には国府や評家との関わりが指摘されるものもある。このように飛鳥時代は、伝統的な墓制である古墳と、中央集権国家の成立期を結ぶ、現代的な用語ではインターフェイスやジャンクションに相当する時代といえる。

近年各地で飛鳥時代の官衙や古墳・寺院・官道などの調査例が増加し、とくに評家遺跡の発見が契機となって、地域社会の動態やその背景などが検討されるようになった。前後の時代からの追跡だけではなく、飛鳥時代の特徴を多

角的・重層的に精査することが可能になってきたといえる。折しも二〇一九年夏には、「飛鳥時代の土器編年再考」シンポジウムが奈良文化財研究所で開催され、畿内をはじめ各地で出土する飛鳥時代の土器編年の再検討が行われている。とくに評家など地方支配に関わる遺跡からは、畿内産土師器の出土が顕著であり、その編年や評価は古代遺跡の研究に大きく関わることで、東国の評家や集落出土土器についてもあらためて見直すことも必要であろう。

郡家遺跡については、評家から継続するものが多いことは、本書の第2部で紹介している遺跡からも分かる。『日本古代の郡衙遺跡』(二〇〇九年、条里制・古代都市研究会編、雄山閣)に取り上げられた遺跡の出現時期を概観すると、おおそ前期評家が約四分の一、後期評家と八世紀以降に出現する郡家がそれぞれ約三分の一であり、約六割が七世紀に整備が開始される評家である。律令国家の地域支配の拠点となる郡家は、前期評家から後期評家へと変遷して整備が進められた結果、郡庁をはじめとして正倉や館・厨家などの施設で構成されるようになったのである。さらに、評家の建設は土地利用や地域の開発に変化をもたらす画期となり、古代社会や古代景観の形成に大きな役割を果たすことになる。飛鳥時代は、律令国家の成立過程を知ることができる時代という位置付けに加え、日本史上でも社会が大きく舵を切る転換の時代であり、あらためて研究の意義を再確認していく必要がある。

本書の刊行にむけて、関係者が準備を進めている最中にも、橘樹官衙遺跡群では学術調査が進み現地説明会などが開催されており、幡羅官衙遺跡群でも保存活用計画の策定がはじまっている。幡羅官衙遺跡群と同市内にある、武蔵国榛沢郡正倉である中宿遺跡(県指定史跡)は、中宿歴史公園として整備され二棟の正倉が復元されて久しい。道の駅に隣接していることもあり、現在でも多くの人々が訪れ、正倉の意味を知り古代景観を楽しんでいる。今後、各地で評家遺跡の史跡整備が実施されていくことになるであろうが、郡家へと継続する変遷の中でどの段階の整備を進めていくのか、歴史の転換点となった評制期の官衙と地域社会の変化をどのような整備で表現するのか、保存・活用・整備の面からも飛鳥時代の研究を進めていく意義を感じている。